

兵庫県議会議員 長瀬たけし 県政報告

〒658-0013
神戸市東灘区
深江北町3丁目4-16
TEL078-435-6380

令和7年度
農政環境常任委員会委員長に内定！
県議初当選から六年目、初の常任委員会委員長

農家もなければ漁師もいない…
東灘区選出議員として考える農政環境

文書問題に端を発した激動の令和六年度兵庫県議会も六月定例議会をもって年度末を迎えます。私は令和六年度は文教常任委員会の副委員長でしたが、いよいよ最後の文教常任委員会が近づいております。

六月定例議会閉会後には、新たに任命された委員の初顔合わせとなる委員会が招集されます。私は新年度農政環境常任委員会の委員長を拝命する予定です。県議会議員としては初めての委員長でございます。

常任委員会とは分野別に七つの委員会に分かれて、全議員がいずれかの委員会に所属します。各委員会に対する会派ごとの定数や委員長などのポストは、会派所属議員数により按分され決定します。自民党は最大会派ですので最も多くのポストが割り当てられます。わが会派では当選一期、二期の議員の中から副委員長を、二期、三期の中から委員長を選出する事になっております。出来るだけ期数の若い間に経験を積む方がよいという方針でございます。

そこで、今年度いづれかの委員長を拝命する事になりましたので、私は迷わず農政環境常任委員会を志願しました。選挙区である東灘区には、農地はなく農家もいらっ

漁する漁船は一隻もございませぬ。そして背後にそびえる六甲山で林業を営む方もおられませぬ。斯様なないないづくしにも関わらず、ド素人の私が志願した理由は「今こそ食の安全・安定そして豊かな里山づくりに向けた動きをしなければならぬ」と確信致したからでございます。

農業を見れば、現下のいわゆる令和の米騒動以前から、様々な問題が提起されておりました。県内の穀倉地帯を選挙区とする先輩議員からは、「農家は黙っていても自民党を応援しているなど」と思ったら大間違いと聞かされておりました。そうした生産者の憤りや嘆きも含めた生の声を聞きたいと考えております。

一方漁業を取り巻く問題については、不漁が定着しつつあるイカナゴ漁に代表される「採れない・売れない」という問題がございます。海中の栄養塩が不足しているのが一因とされ、下水処理施設で放流される処理水について、高度処理されたものに栄養塩を添加して放流する試みが続けられております。

また、日本海側を見ると、漁獲高が瀬戸内海側の四分の一にまで減少していま



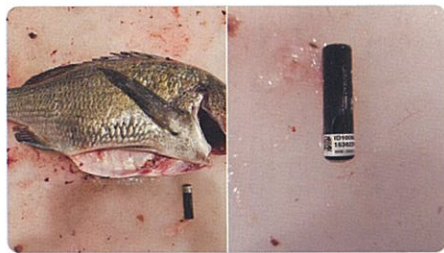
す。これは主力の沖合漁業が、燃料費高騰・取引価格の下落などにより経営環境が悪化している上に、中国・韓国・北朝鮮・ロシアとの競合による採り負けが原因です。それらの国の漁業監視船による嫌がらせのような取り締まりが横行していると、ある漁業協同組合の幹部からお聴きした事がございます。

買得商品を探し同じような価格ならば兵庫産を選んで喜んでおりますが、生産者に対して思いを致していたかと問われれば、正直「美味しくて安い県産品が手に入ればいい」と考えておりました。神戸市東灘区は県内最大の消費地であると言っても過言ではありません。今年度一年間を通して、生産者と消費者を繋げるような活動をして参りたいと考えております。

身近な環境に着目して、 実体を伴った環境政策へ！

須磨海苔のクロダイによる食害調査に
釣り人がまさかの一役！

兵庫県は近年深刻化するクロダイ（チヌ）による海苔食害の実態を把握するため、生け捕りしたクロダイにGPS機器を埋め込み放流するクロダイの生態調査を須磨浦水産様のご協力のもと須磨海岸で実施して



午前8:39 - 2025年4月18日 1,909.47 件の表示

いうコメントと共に、私がその八か月前に公開していたYouTube動画がURLと共にリポストされました。

この動画は捕獲したクロダイへGPS機器を埋め込む手術の模様を収録した兵庫県水産試験場の調査業務を取材したものでした。これにより当該クロダイは調査に用いられた魚体であり、須磨沖から徳島県鳴門市沖に移動していた事が証明されました。思わぬ形で兵庫県の調査に貢献できてとても嬉しかったです。この調査は現在も継続しております。

本年四月鳴門市内で釣り上げられたクロダイをさばいてみたら、お腹から謎の機器が出てきたという記事が、その釣り人さんによってXに投稿されました。（写真右）

写真はその投稿にあった写真です。謎の機器が出てきて驚いた投稿主さんの元には、「もしかしたらこれかもしれない」と

ここで特筆すべきは、生態調査に用いられたクロダイは全て釣り人によって須磨海岸で釣り上げられた魚体だったという点です。調査開始当初は調査用魚体の入手を幅広く県内各地に求めたところ、GPS機器を埋め込んで放流したとたん、どこかへ泳ぎ去ってしまったそうです。（鳴門で捕獲されたクロダイもその可能性あり）須磨海苔に食害をもたらせていたのは居つきのクロダイだったのです。そこで居つきのクロダイを入手しようとしたのですが、定置網に入った魚体は傷つき弱っているため調査用

魚体には適しませんでした。困り果てた結果、釣り人にお願いしようという事になり、クロダイ釣りの全国大会にも出場経験のある凄腕釣り師が集められ、須磨海岸一帯で捕獲して頂き、居つきのとても元気な魚体を手に入れることができました。



調査用魚体の入手と再捕獲の両方で活躍した釣り人ですが、漁業関係者と釣り人が協働するということは極めて希であり、

場所によっては対立している場合も少なくありません。神戸市は近年、港の護岸や沖合堤防から次々に釣り人を締め出すべく、釣り禁止指定を実施してまいりました。これには立ち入り禁止地域への侵入やゴミ不法投棄など釣り人のマナー違反に起因するものが殆どであり、釣り人は大いに反省すべきです。しかし、ちゃんとルールを守って頂ければ釣り人は最も身近な観察者であり、今回の調査が示すように協働の可能性ももっと広がると思います。これは正に農政環境常任委員会のテーマとして取り上げるべき好材料だと考えております。

上写真は私のYouTube動画から切り抜いたクロダイへGPS機器を埋め込む手術の様です。

赤ちゃんも高齢者までひとり年間八〇〇円 県民緑税の使い道

令和七年度予算質疑から見る課題と解決方法

県民緑税は、豊かな緑を次の世代に引き継いでいくため、県民共通の財産である「緑」の保全・再生を社会全体で支え、県民総参加で取り組む仕組みとして平成十八年度から導入された県民税均等割超過課税

です。これを財源として、森林の防災面での機能を高める「災害に強い森づくり」や、環境改善等を目的とした都市の緑化が進められています。県政改革調査特別委員会の中でも、今後、分収造林事業に代わる新たな森林管理スキームの中で、このメニューを活用することが選択肢の一つとして言及されたところであります。

一方で、この県民緑税には導入時から「都市部の県民に恩恵がない」という意見があ

り、当時の諸先輩方は都市部住民に粘り強く説明を尽くして理解を得てこられたと聞いています。県民緑税の課税期間は五年間であり、期間を経過する時点で事業成果や社会情勢により見直しを検討されますが、第四期である現在の期間は令和七年度で満了します。

そして来年度、次期延長の検討に際しては、都市部への「割戻し」という議論も想定されます。神戸市会では現にそのような動きがあるやに聞いていることも、この県議会の中で皆さんに知って頂きたいと思えます。都市部住民にとっての具体的な恩恵についても提示し、誠意をもって説明を尽くす必要があると、強く訴えております。

森林の防災面での機能強化等の取組については、今年度、検討会を立ち上げて事業効果の検証が行われる中で、第五期対策に

向けた課題として、やはり「都市部の理解醸成が必要」との意見も出ていると聞いています。

このほか、都市部との関係では、特に六甲山系において、風化花崗岩地帯や松枯れ跡地の広葉樹林の急斜面で表層崩壊が多発したことを踏まえた「都市やま防災林整備事業」が平成二十八年度から実施されていると承知していますが、都市部の住民がその恩恵を実感しているかといえ、意識することすら難しいのではないのでしょうか。

具体例をひとつ挙げます。神戸市が毎年十一月に実施している六甲全山縦走大会というものがございます。これは須磨区の須

この機を逃さず 花粉症対策を一気に進める！

都市部では、空気中の大気汚染物質が多いことや、コンクリートやアスファルトに地面が覆われているため地面に落ちた花粉が再飛散することが、地方部よりも花粉症を悪化させる要因と言われていると

す。都市部の利便性と表裏のデメリットです。森林に求められる機能が多様化しているという指摘に併せて、

その例として、防災機能の他、CO₂吸収源、生物多様性、獣害軽減、そして「花粉症対策」が挙げられています。



省庁横断で「花粉症対策 初期集中対応パッケージ」を進める国において、「発生源対策」は花粉症対策三本柱の一つに上げられ、令和十五年度までに花粉の発生源となるスギ人工林を約二割減少させることを目標として、スギ人工林の伐採・植替え等の加速化を推進するとされています。

新たな森林管理スキームにおいて、伐採収益が見込めない保育林については、管理コストが低く公益的機能が低い針広混交林に誘導していくことが示されているが、スギ人工林が針広混交林に置き換えられにくくことは直接的に花粉症の軽減に繋がります。

そこで、花粉症対策という観点から、今後、新たな森林管理スキームを展開していくのかを重要なテーマとして取り上げて参りたいと考えております。

磨浦公園から摩耶山・六甲山最高峰を経て宝塚市へ至る五十六キロメートルの縦走路を一日で走破するというものですが、実際に縦走路を歩いてみると神戸市内から西宮市・宝塚市へと進むと、登山道を含めた森林の整備状況に明らかな違いが見られます。六甲山系の森林管理が市に委ねられており、各自自治体の予算状況等による都市間格差が如実に顕在化しております。県の関与を伺わせる様子を登山者から見ることがございません。森林の防災機能という観点から、都市部住民に「他人ごとではない」と実感してもらうため、どのようなアプローチが考えられるのか、農政環境常任委員会として取り組んで参ります。